

83

## 岩屋寺

創建年代などは不明ですが、創建時は天台宗の寺で比叡山三千坊の一つに数えられています。江戸時代に曹洞宗の寺として再興しました。

本尊の不動明王は智証大師の作とされ、大石内蔵助の念持仏です。大石内蔵助は、赤穂城退去後、赤穂藩士で山科出身の進藤源四郎でした。

# (十三) 大岩街道



内蔵助ら赤穂四十七士の木造や遺品などが保存されています。

毎年一二月



寺には大石内蔵助ら赤穂四十七士の木造や遺品などが保存されています。

毎年一二月

神、産土神として、江戸時代に「西岩屋大明神」となり、明治に現在の「山科神社」と改称されています。

平安時代の八九七年に日本武尊・稚武王を祭神として、宇多天皇の勅命により創建されました。この地の豪族である宮道氏の祖

一四日に行われる山科義士まつりの行列は、ここで内蔵助や主税、遙泉院らが代表礼拝をした後、いよいよ最後の大石神社へと隊を進めます。

毎年一二月

の縁故により、ここに家屋を建て、永住を装つたとされており、当時の家屋の古材で作られた茶室が建っています。

## 85 宮道神社

平安時代の八九八年に創建された宮道神社は、日本武

尊、稚武王、

宮道弥益、

列子、弥益

の妻大宅氏

の五座を祀



藤原高藤、列子とその両親が祀られています。

## 86 藤原定方墓碑

三条右大臣藤原定方は平安時代の公家・歌人であり、醍醐天皇を外祖父に、藤原高藤を父に持ち、百人一首の「名にし負はば 逢坂山



つています。一六六五年には藤原高藤、藤原定方ら勧修寺ゆかりの人を合わせて祀り、二所大明神とも呼ばれています。

## 87 仏光院

深草野から勧修寺に至る道で、勧修寺越・大津街道ともいわれました。新たに開いた道です。



藤原高藤、列子とその両親が祀られています。

## 88 勸修寺

平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。

境内には、平安時代の面影を残す「氷室池」を中心とした、背後の山々を背景とする借景庭園があり、水戸光圀が寄進したと伝えられ、勧修寺型灯籠と呼ばれるユニークな灯籠もあります。

現在の書院や宸殿は、江戸時代に天皇の旧殿を移築したものですが、書院は国の重要文化財、宸殿は江戸時代の一六九五年に再建された本殿などは、京都市指定文化財となっています。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺に改めたのが始まりといわれています。

今昔物語集では、この場所が母方の祖父母である藤原高藤と列子とのロマンスの場として語り継がれていました。



平安時代の九〇〇年ごろ、醍醐天皇が母である藤原胤子を弔うため、胤子の母方の実家であった宮道弥益の邸宅を寺